開殿坊

門屋の邑に某と云ふ郷士があつた。遠い昔のこと、豪奢な此の家に毎日〳〵網を肩にしては河に出て魚獲三昧にふける元氣な老人があつた。或る年の夏、鱒を晩酌の肴にせんと、珍しくも鉤を携へて河中に飛び込んだ。すると不思議なことに、いつもに似合わず、腕がにぶつて大事な鱒取り鉤を何ものかに奪はれてしまつた。老人は驚いて水中深くその鉤を探り廻つたけれどもその鉤の行方が分からない。いよいよあせつて捜ね廻るうち、ふと目に映じたのは一点の光明である。老人は水中にこんな光りがあらう筈がないと思ひ、勇を鼓して探険せんとし水底深くその光明に近づいて入つた。こはいかに、水中であり乍ら老人の耳にはつきり讀經の聲がきこえて來た。夢か現か老人はいよ〳〵不思議に思ひ聲のする方へ進んでいつた。するとそこには大きな岩の窓が立てられてあつて河水はそこで遮ぎられ、内では讀經の最中であつた。老人はおそるおそる窓に寄つてのぞかんとした。するとその聲がはたと止んで、こんどは大喝一聲、

「誰か」と叱りつけられた。

老人は、「門屋の住人何の某でござる」と、答へたるに、

「何故此處へ來たか」と問はれた。

老人は「俺は漁を好む。今鱒鉤を何者にか奪はれ、それを取返へさうと探ねて來た」と云つた。すると、岩窟の中から、

「鱒鉤を奪つたのは吾なり、吾は開殿寺に住んだ、開殿某大僧正だ世に在りし頃洪水の爲伽藍を流失してより再興せんとして觀進に力を盡したが凶作の爲誰一人應ずる者なく、此の淵に入つて主となつた。吾は平常金物を嫌ふ。爾今金物を此の淵に入れざればよし、然らざれば汝の身も再び返さぬ」と身骨に徹する様な重苦るしい聲で叱りつけられた。

そこで某老人は低頭平身、詫びて許しを乞ひ再び金物を絶對に入れぬことを誓ひたるに、岩窟の窓を開いて出て來たのは、古びた法衣を着けた大坊主で眼光人を射る如く、老人は身の毛もよだつ恐怖をこらへ、辛じて鉤を貰ひ受けて水上に再び歸宅したと傳へられてゐる。それより稱して開殿淵と云ひ現今開殿と稱するは元の開殿寺の跡であると云ふ（小山田字高野の南端檜木内川の北岸）その昔角館城主等が川狩りをするにも開殿淵は難物とされた。それは如何に日本晴れのよい日でも此の淵に入るときは一天俄にかき曇つて大雷雨となり命からがら歸館するのであつた。